

没後 70 年 吉田博展



世界を魅了した多色摺木版の極致、一挙公開

たしよくずりもくはん

明治から昭和まで活躍した洋画家の吉田博（1876-1950）は、風景画の巨匠として知られます。本展では後半生に没頭した木版画約 200 点とともに油彩画、水彩画、写生帖、版木を紹介し、吉田博が捉えた美の世界を探访します。



静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

tel. 054-273-1515〔代表〕 fax. 054-273-1518

【プレスリリースのお問合せ】 展覧会担当：山本・大石 広報担当：大庭



東京の自宅アトリエにて 昭和 24 (1949) 年

吉田博について

福岡県に生まれた吉田博 (1876-1950) は、明治 27 (1894) 年に上京、画塾・不同舎で洋画を学びました。明治 32 (1899) 年には日本で描きためた水彩画を携えて渡米、自作を販売して渡欧資金を作るという快挙を成し遂げます。ヨーロッパ各地をめぐり明治 34 (1901) 年に帰国すると、太平洋画会や文部省美術展覧会で風景画の第一人者として活躍しました。

大正後期からは、西洋画の写実的な描写と日本の伝統的な木版技法を統合すべく研究を重ね、生涯に約 250

種もの木版画を制作しました。自然へ分け入って体得した風景を表現するため、吉田博は平均して 30 回以上、時には 100 回近くも摺りを重ねました。精緻で清新な作品は世界中で愛され、かのダイアナ妃の執務室に飾られていたことでも知られています。

若い頃から世界を自らの肌で感じ、日本人ならではの絵画を考え続けた吉田博にとって、木版画は一つの到達点でした。浮世絵以来の伝統技法に近代的な美意識を盛り込んだ、多色摺木版の極致ともいえる名作の数々をお楽しみください。

開催概要

■会場 : 静岡市美術館

■開催期間 : 2021 年 6 月 19 日 (土) - 8 月 29 日 (日) 【62 日間】

* 会期中一部展示替えあり。前期 7 月 25 日 (日) まで、後期 7 月 27 日 (火) から

■休館日 : 毎週月曜日 * 8 月 9 日 (月・休) は開館、10 日 (火) 休館

■開館時間 : 10:00 - 19:00 (展示室入場は閉館 30 分前まで)

■観覧料 : 一般 1,300 (1,100) 円、大高生・70 歳以上 900 (700) 円、中学生以下無料

* () 内は前売および当日に限り 20 名以上の団体料金

* 障害者手帳等をご持参の方および介助原則 1 名は無料

* 当館 HP にて日時指定予約可能。詳細は HP をご覧ください

■前売券 : 2021 年 5 月 22 日 (土) から 6 月 18 日 (金) まで販売

■主催等

主催：静岡市、静岡市美術館 指定管理者 (公財) 静岡市文化振興財団、テレビ静岡、中日新聞東海本社、日本経済新聞社 共催：毎日新聞社

後援：静岡市教育委員会、静岡県教育委員会 協賛：ニューカラー写真印刷

■関連事業 詳細は同封のチラシ・当館ホームページをご参照ください。

講演会①7 月 3 日 (土) 講師：安永 幸一氏 (元福岡アジア美術館館長) / 申込締切：6 月 17 日 (木) 必着

講演会②7 月 31 日 (土) 講師：成瀬 洋平氏 (山岳画家・山岳ライター) / 申込締切：7 月 15 日 (木) 必着

学芸員によるスライドトーク ①7 月 17 日 (土) ②8 月 9 日 (月・休) / 申込不要

展覧会のみどころ

（１）世界を魅了した木版画

世界各国を旅し、雄大な自然をとらえた吉田博のみずみずしい木版画は、アメリカをはじめ国外で早くから紹介され、現在に至るまで高い評価を誇ります。イギリスのダイアナ妃や精神科医フロイトに愛されたことでも知られています。日本に生きる画家として、世界に対抗しうるオリジナルな「絵」を考え続けた吉田博ならではの新しい木版画です。

（２）版画技法のあくなき探究、色彩表現の独創性

彫師、摺師と協働し、自らも腕を揮った吉田博の精緻な表現には、高い技術の裏付けがあります。複雑な色彩表現のために重ねた摺数の平均は 30 数度に及び、中には 96 度摺に達するものもあります。また巨大な版木を用いた特大版を制作するなど、あくなき探究心をもって、独創的な木版画を生み出しました。

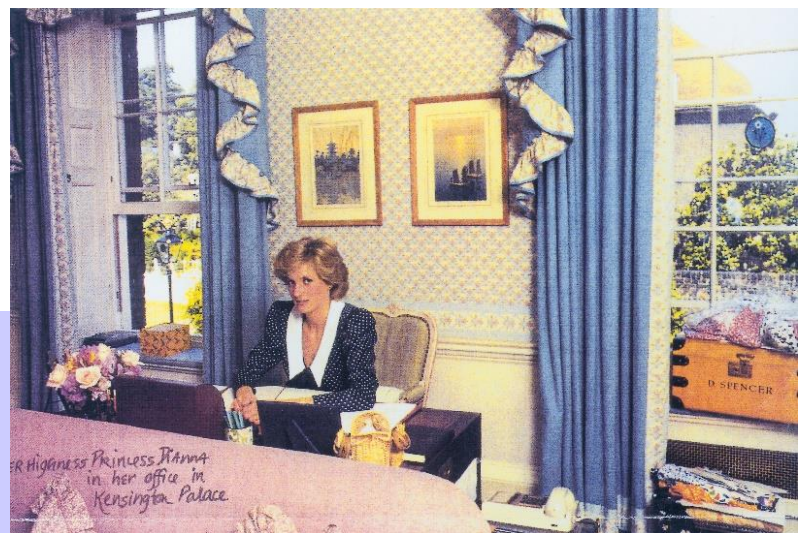
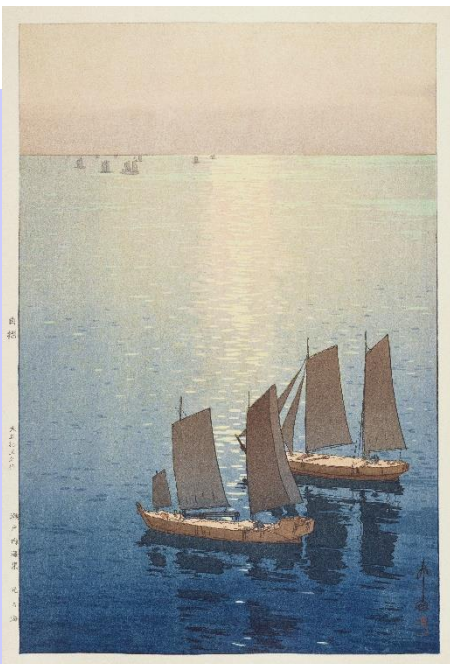
《帆船》の連作のように同じ版木を用い、摺色を替えることで刻々と変化する大気や光を表わす工夫もしばしば見られます。本展では、初公開となる特大版の版木も展示いたします。

（３）旅と風景

生涯にわたり風景を描き続けた吉田博。その作品は、画家自らが現地に赴いて早描きした写生をもとに制作されました。世界百景の制作を夢見た吉田博の木版画は、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの自然風景から、富士や日本アルプスといった日本の山岳、穏やかな瀬戸内海など多岐にわたります。画家の捉えた世界の絶景は、私たちを異なる世界へと誘ってくれることでしょう。

ダイアナ妃の執務室に飾られる吉田博の木版画

『Majesty』1987 年より、吉田司氏提供



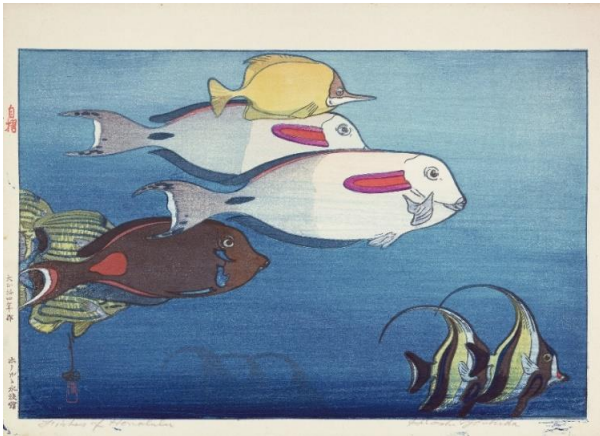
《瀬戸内海集 光る海》

大正 15 (1926) 年

天皇陛下、皇太子時代の御著書の表紙にも！



主な出品作品



初めての私家版木版画

《米国シリーズ ホノルル水族館》

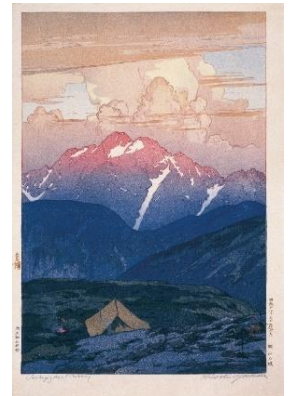
大正 14 (1925) 年

関東大震災の被災画家救済のため3度目の渡米を果たした吉田博は、日本の木版画の人気ぶりを知り、帰国後は彫師と摺師を雇い、自ら版元となって私家版『米国』シリーズを完成させました。シリーズ冒頭の本作は水槽を泳ぐ色とりどりの魚を描いたもの。複雑な青色の濃淡によって、水中の遠近感が表現されています。西洋画的描写と伝統技法が融合した吉田博独自の木版画の誕生を告げる作品です。

「登って、そこに無限の美を感受するのが、 登山の最後の喜びではないだろうか」——吉田博

《日本アルプス十二題 劔山の朝》 大正 15 (1926) 年

吉田博は風景を描くため、1年の半分近くは写生旅行へ出掛けていたといいます。天候や時間により表情を変える山で理想の風景を求めて、高山に2、3ヶ月も滞在することもありました。本作品は北アルプス北部の鹿島槍ヶ岳から朝日で紅に染まる劔岳を捉えたもので（吉田博は「鹿嶋鎗岳」「劔山」と表記）、吉田博の木版画の中でも特に有名な1点です。壮大な空の下で神々しく輝く山頂が印象的です。まだ薄暗い近景にはテントと煙を上げる焚火が厳粛な夜明けの光景に人の気配を伝えます。（本リリース表紙の図版もご参照下さい）

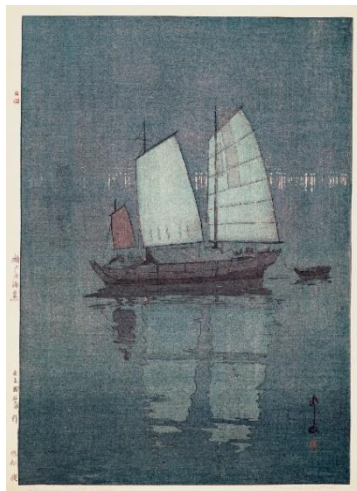
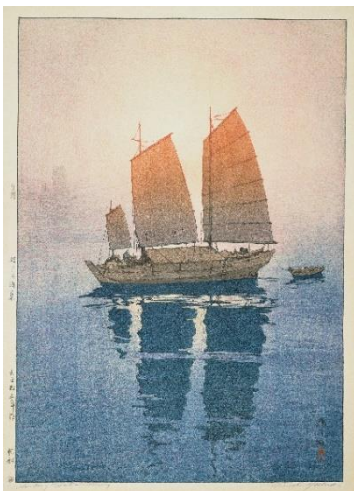


時間や天候の変化を捉える「別摺」 べつずり

《瀬戸内海集 帆船 朝》

《瀬戸内海集 帆船 夜》

いずれも大正 15 (1926) 年



吉田博が工夫した木版技法に「別摺」があります。同じ版木を異なる色の組み合わせで摺り連作とすることで、時間や天候の変化を表現する手法です。『帆船』のシリーズは、「朝」「夜」のほか、「霧」「夕」など計6点が制作されました。



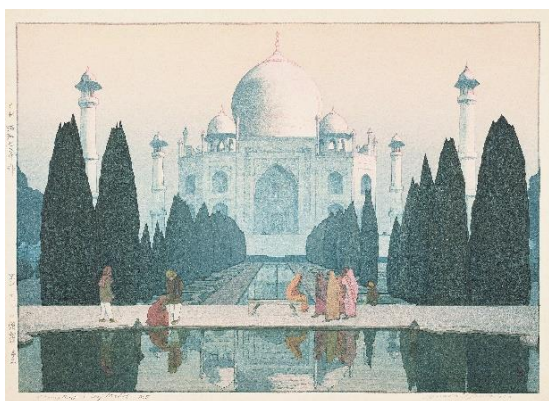
特大版で富士に挑む

《富士拾景 朝日》 大正 15 (1926) 年
長辺が 70cm を超える、木版画としては破格の大作。版木が大きいほど湿らせた紙との収縮率の違いによるずれが出やすくなり、摺り重ねは困難になります。特大版挑戦の初年に作られた本作でも多いに苦勞したとの逸話が伝えられます。富士の稜線に宝永山が盛り上がる、静岡側からの眺めです。

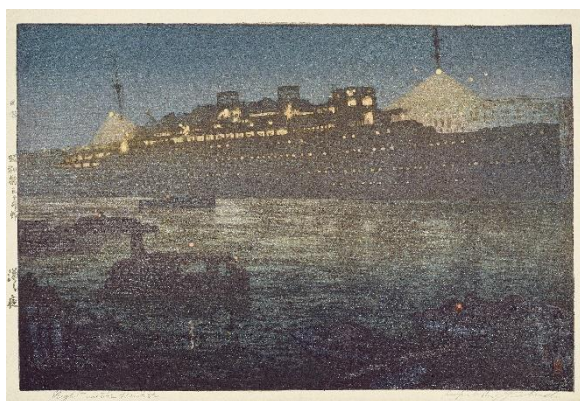
水流を際立たせる渾身の彫り

《溪流》 昭和 3 (1928) 年

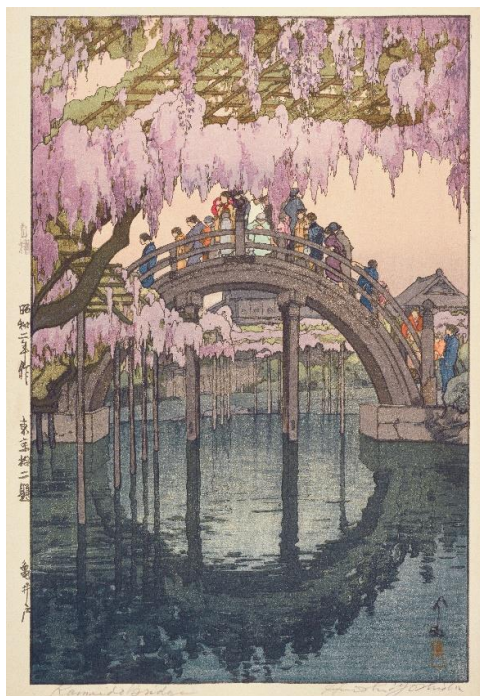
吉田博は彫師と摺師を抱えて木版画を制作していましたが、職人を指導出来るよう自身も木版の技術を磨いたといえます。本作品は自ら刀をふるい、複雑な水の流れを彫り出しました。根を詰め、歯がひどく腫れ上がるほどの集中ぶりだったそうです。無駄のない線と色彩が水流の早さと量感を余すところなく伝えます。



朝霧のヴェールをまとう霊廟
《印度と東南アジア タジマハルの朝霧 第五》
昭和 7 (1932) 年

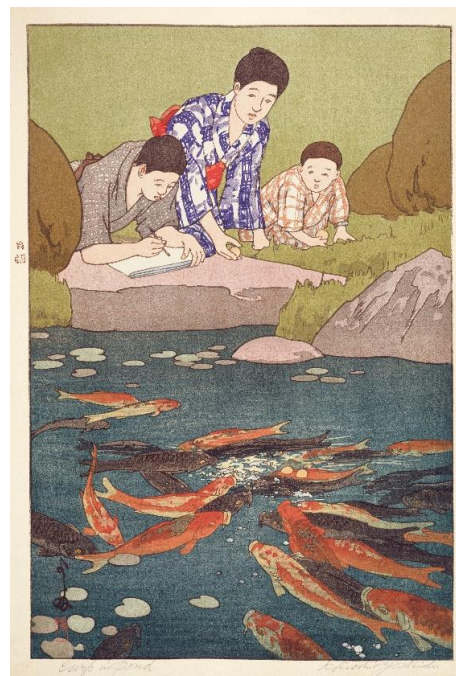


暗がりを彩るさまざまな光
《港之夜》
昭和 13 (1938) 年



藤波の下には、さざ波にゆれる倒影

《東京拾二題 亀戸》昭和 2（1927）年



家族のほのぼのとしたひとこま

《池の鯉》大正 15（1926）年

驚異の 96 度摺り

《陽明門》昭和 12（1937）年

吉田博の木版画は、細かな色の違いを表現するため薄い色が何度も摺り重ねられているのが特徴です。本作品の摺数はなんと 96 回にも達します。複雑な建物の陰影、背後の杉木立の繊細なグラデーションなど、余韻のある深い色合いが作品の魅力を高めています。

吉田博の「自摺」

博の木版画には年記や題名、署名のほかに「自摺」の文字が添えられています。実際に作業を行ったのは摺師であっても、博が現場に張り付いて仕上がりを監修していました。自らが摺りに責任を持つという気概を込めての「自摺」の表記です。

